



ピッポ新聞

2008
12
No.238

子どもの本専門店
ピッポ

年間購読料 (送料込み) 1500 円

編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

E-mail itoh@pippo.co.jp

この冬は、こんな
本やゲームはいかが

『にんじんのたね』 (ルース・クラウス・作
クロケット・ジョンソン・絵 おしおたかし・
訳 945 円 こぐま社)

男の子が一粒のにんじんの種を蒔きました。



「芽」は出て
こないと家族
みんなから言
われるのです。
男の子は来る
日も来る日も
世話をした。
すると・・・

今ほくも畑で人参を植えています。この主人公
のように一生懸命に世話をし、ほったらか
しで雑草の間で見え隠れしています。さていつ
になったら収穫できるかしら？

この絵本は以前ペンギン社から『ほくのにんじ
ん』として、渡辺茂男の訳で出ていて、品切れ
だったのだが、訳者を変えて、こぐま社から再
刊されたものです。

『3びきのゆきぐま』 (ジャン・プレト・作
松井るり子・訳 1365 円 ほるぷ出版)



イヌイットの少女が、氷上のイグルーに迷い込
み、そこに置いて
あったスープを飲
み、ブーツを履き、
ベッドに寝てしまっ
た。そこに、この
イグルーの主が戻っ
てきた。その主と
は誰だったのかな？
この絵本は「3び
きのくま」の北極
クマ版。舞台がす
べて北極圏の氷の

海の上。見開きページの左右では北極圏の生き
物たちが登場して、物語の進行役を務めたり、
別のお話が進んだりします。アメリカの絵本
作家の手による絵本。

『いろいろきている』 (谷川俊太郎・文 元永定
正・絵 840 円
福音館書店)

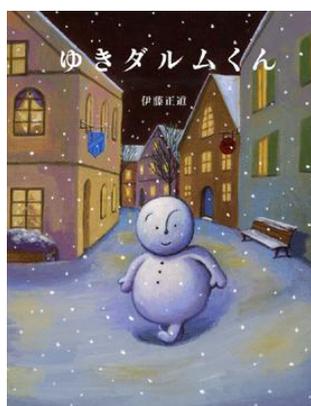
元永定正の手に掛かる
と、さまざまな色にな
にやら生き物のようだ。



谷川俊太郎の文章がく
わわると、抽象の世界
が一つの物語世界とし
てあらわされ、想像の
世界が動き出す。谷川
俊太郎の文が、読者を

不思議な物語に導いてくれるのだ！

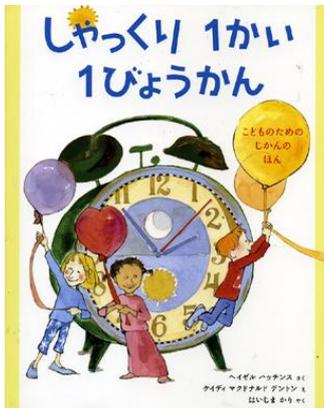
『ゆきダルムくん』(伊藤正道・作 1103円 教育画劇)



ゆきだるまのダルム君だけは溶けません。それどころか歩くことができるところまで歩けるようになります。

『落ちた帽子を拾ってあげて、持ち主のバイオリニストのミリアと親しくなりました。二人は楽しい時を過ごしました。ミリアのコンサートの前晩、春の雪が激しく降りました。朝になると・・・これは初恋の絵本かな？初恋は溶けて消えるものだものね。』

『しゃっくり1かい1びょうかん』(ヘイゼル・ハッチンス・作 マクドナルド・デントン・絵はいじまかり・訳 1365円 福音館書店)



この絵本副題に「こどものためのじかんほん」とあるように、子どもが経験したり見・聴いたりしたものを絵と文で示して時間をわかりやすく説明し

ている。表題の「しゃっくり1かい1びょうかん」という具合です。1秒の次は1分、1時間、1日、とすすみ1年間のときの経過を描いている。

同じように時の経過をあらわしている絵本にはバージニア・リ・バートンの『ちいさいおうち』とものと長い時(歴史)を表した『せいめいのれきし』(岩波書店)があり、こちらもお薦めしたい。

『ドリトル先生アフリカへいく』(ヒュー・ロフティング・原作 南條竹則・文 茂田井武・絵 1575円 集英社)



お馴染みの「ドリトル先生」の物語が、絵本としてでた、この絵本の絵はちよつと変わっていて、元は茂田井武が幻灯のためにスライドにえがいたもので、それを絵本にしたということですが、とても素朴でありながら、暖か

さが伝わってきます。そういえば、幻燈はぼくが子どもの頃よく見た記憶があるが、まだテレビが家庭には無かった頃のことです。大人の方にちよつとした絵本のプレゼントとしていかがですか。

『雪の日のたんじょう日』(ヘレン・ケイ・作 バーバラ・クーニー・絵 あんどうのりこ・訳 1575円 長崎出版)



スティープは間近にせまった自分の誕生日に雪が積もることをねがっていました。しかし雪は降りそうにありません。寝ても覚めても雪のことばかり

考えていました。ところが、誕生日の前日、願いが適って雪が降り出したのです。どんどん積もり、とうとう大雪になってしまいました。町の交通はストップしてしまいました。今度は雪がやむことを願わなければなりません。何故って、大雪で友達が誕生日会にこれなくなってしまうからです。天気の変化と少年の心の動きが、回りの大人たちの心配りと共に、とても素直に伝わってきます。クーニーファンや、これも大人の絵本プレゼントの一冊にお薦めです。

『ありのフェルダ』(オンドジェイ・セコラ・作 関沢明子・訳 1470円 福音館書店)

ありのフェルダは新しい土地に移ってきました。この引越しの様子からして、とても派手な登場で、ほかの虫たちに波紋を広げます。フェルダは自分の手で家を建てるのです。そうなんです、フェルダはなんでも屋ですからそれができるのです。事件は、フェルダがてんとつむしのベルシカに恋をしたことで展開していきます。さて、このお話しでは、さまざまな虫たちが登場して

きますが、登場する虫たちは自然界に於ける虫の個性(?)を踏まえて描かれていきます。著者がかなり昆虫好きだったことが伺われます。絵も著書が描いたものですが、色合いもとても素朴で楽しい絵です。



この童話はチエコの子どもたちに七十年以上読み継がれているそうです。ですから、現在は大人でもこの童話の話をする、心を開く人も多いということ。虫好きの子におすすりめです。

上読み継がれているそうです。ですから、現在は大人でもこの童話の話をする、心を開く人も

『サーカス』(中原中也・詩 西村温子・絵 斎藤孝・編 1260円 ほるぷ出版)



中也の「サーカス」という詩を絵本にした。空中ブランコのゆるる表現の「ゆあーん ゆあーん ゆやゆよーん」という言葉は、斎藤孝の解説をまつまでもなく、子どもおとなもくちずさみたくなるフレーズだ。「幾時代かありませんか」

して 茶色い戦争ありました 幾時代かありませんか 冬は疾風吹きました・・・こんな出だしだとおもわず口ずさみたくありませんか。西村温子の絵も、なにかしら心の奥の中也の詩のイメージに合っている。

『トランプおじさんとペロンジのなぞ』(たかどのほうこ・作 にしむらあつこ・絵 1260円 偕成社)



トランプおじさんはちよつと変わったおじさんです。森の外れに犬と一緒に住んでいて、新聞を5紙と。動物の新聞を2紙とっています。

一番変わっているところは「動物語」が話せることでした。ところがこのところ「もぐらクラブ」(もぐらの新聞)が、紙面が白いままで配達されてきます。そこでおじさんは、シャーロック・ホームズばりの出で立ちで、愛犬のイルカーネポポラーレを助手に仕立てて、事件解決にもぐらの町へ出かけていきました・・・おじさんは事件を解決できるのかしら?登場してくる人物(この場合はモグラ)や物の名前が駄洒落風(ことばあそび?)で面白いし、挿し絵もカラーが多くて親しみを感じる、楽しい童話です。

『ムーンレディーの記憶』(E・R・カニグズバーク・作 金原瑞人・訳 1995円 岩波書店)

カニグズバークの作品には美術館や画家や絵画が登場し、それが作品の重要な部分を占めるものがある。最初の作品『クロウディアの秘密』(岩波少年文庫カニグズ

バーク作品集1)は、ニューヨークのメトロポリタン美術館に、姉弟が家出するというものだったし、『ジョコンダ夫人の肖像』(単行本とカニグズバーク作品集4)は、レオナルド・ダ・ヴィンチのモナ・リザ(ジョコンダ夫人)の話です。カニグズバークの最新刊である本書『ムーンレディーの記憶』も絵にまつわる物語です。



この物語は、主人公の少年アメデオの友人とその母が引き受けた仕事(骨董品を整理して売る仕事)を手伝います。それは大邸宅に住む一人暮らしの老婦人の引越すための家財道具の処理です。その手伝いをしてきたアメデオが一枚の古ぼけたヌード画を発見します。

この絵がかつて退廃芸術家としてヒットラーのナチスから排除された画家の一人モゼリアーニーの作品だったのです・・・現代と過去そして現代と過去のつながりが入り組んだミステリー仕立ての物語になっています。

訳者の金原瑞人は後書きで、こんなことを書いています。「カニグズバークの作品はかなりよんでいるし・・・しかし、読み終えて、『すごい!』とため息をついたのはこれが初めてかもしれない・・・この『ムーンレディーの記憶』は一つの銀河系のように大きく、時間と空間を越えて広

がっている。それにこの密度と迫力は、いままでのカニゲズバーグにはなかった。．．．そして読み直すたびに発見があった」
 ぼくもこれを一気によんでこの紹介文を書き手いりますが、一度だけで終わるつもりはなく、この正月に読み返してみるつもりです。ファンタジー作品に飽き飽きしている人、やっぱり児童文学ってのは、いいものなんです！

カルタ・双六・ゲーム

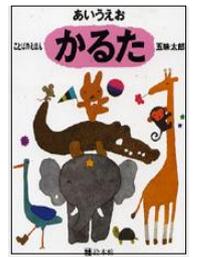
『たべものかるた』（オノ・グラフィック 1050円）このカルタは食べ物に関することを、子どもから大人まで様々の人が募集してできた「あいうえおかるた」
 「朝おきて 味噌のかおり うれしいな」



『エルマーとりゅう あいうえおかるた』（オノグラフィック 1200円）「エルマーとりゅう」のものがたりのかるた

『ことばのえほんかるた』（五味太郎 1050円 絵本館）「あくび あざざし

あそびに あきた」



『上方 いろは』（きりえかるた 滝平二郎 1575円）新泉社）「一寸さきはやみ」



『11ぴきのねこかるた』（馬場のぼる 260円 こぐま社）あいうえおかるた「あしたは えんそく ゆでたまご」



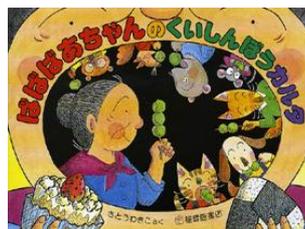
『日本の昔話かるた』（赤羽末吉・絵 260円 福音館書店）「あつちうち 茶がまに ばけた きつねどん」

『たべものだいすきかるた』（900円 世界文化社）弁当ばこ入っています。



『いろはかるた だじゃれゆうえんち』（内田麟太郎・文 川端理絵・絵 1050円 民衆社）「いかは いかにも いばつて いかん」

『ぐりとぐら かるた』（中川李枝子・作 山脇百合子・絵 1050円 福音館書店）「あおいぼうし あかいぼうし ぐりとぐら」



『ばばあちゃんのくいしんぼカルタ』（さとうわきこ・作 1050円 福音館書店）「あかるい つきよだ おもてで たべよう」

『藪内正幸の どうぶつカード』（980円 福音館書店）メモリー（神経衰弱遊び）としてあそびます。2枚の同じカードを引き当てます。

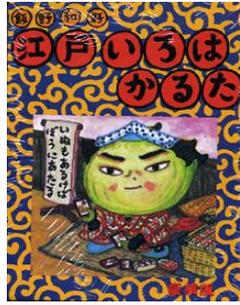


『こんちゅう えあわせカード』(松岡達英 840円 オノグラフィックス) 3枚のカードを揃えると一匹の昆虫になります。

『エルマーとりゅう メモリーカード』
『わにわに メモリーカード』(各840円 オノグラフィックス)



『江戸いろはかるた』(飯野和好 1155円 金の星社) 「いぬもあるけば ぼうにあたる」



『せかい いっしゅうかるた』(1000円 世界文化社) 「あめりかは あくしゅで ハローとごあいさつ」

『ピーマン村 かるた』(中川ひろたか・文村上康成・絵 1365円 童心社)



『魚カード』(夏目義一 1470円 福音館書店)

何種類かの遊びができます、遊び方の解説と魚の説明の冊子が付いています。

『かわいいむしの すごろく』(高塚博成・構成 仲川道子・絵 1050円 童心社)

『おばけすごろく』(せなけいこ・作 1050円 童心社)

『ねぎぼうずのあさたる 東海道五十三次 すごろく』(飯野和好・作 580円 福音館書店)

『ばばあちゃんのぼうけん すごろく』(さとう わきこ・作 580円 福音館書店)



デパートの古書展

『雑記帳』 拡大版

前号からの続き

京都百万遍の古書即売会

開始時間まで少し間があります。場内の放送が本堂で古本供養があるから一般の人もどうぞと呼びかけていました。持ち前の好奇心で本堂に上がり込み、これに参加しました。

供養はなにやら大きな数珠を参加者が坊さんのお経にあわせてぐるぐる(ゆつくりです)回すようです。数珠玉一個の大きさは、大人の両手の平で包み込めるぐらいでした。参加者四十人ほどがこの数珠を囲んで座り、読経にあわせて回していくのです。まわしていると、さらに大きくて房のついた少し立派な数珠玉がまわってきました。それを頭上に掲げてお辞儀をする人もいました。供養が終わると出口のところ、古書組合の人が本日のみ使用できる三百円のサービスクレーム券をくれました。お寺で即売会をやり、さらに古書供養やるなど、さすがに京都の古書組合だ!

本堂からでてみると、境内のたくさんのテントの中で一つだけ、テントの回りをお

客が何重にも囲んでいるところがあります。テントにはまだ覆いがしてありますから中は見えません。なのにこの人集り、余程魅力があるに違いない。

でも、とりあえず子ども本のテントの近くで待つことにしました。何人かが回りでオープンを待っています。

午前十時になりテントの覆いがはずされ、即売会の開始です。人混みの中をざっと見て回ったのですが、残念ながら触手の動く本は見つかりません。今度はゆっくりまわりましたが、やはり買いたい本はありませんでした。しかし、ここでも何人かは次々にカゴに本を入れていきます。

何杯か分の本を塔頭の脇に確保している二人連れがいました。ぼくは本を探すのをやめて、この二人に注目していました。二人はいらぬ本を戻して、必要な本だけを購入していききました。そばで会話を聴いていて分かったのですが、どうやら二人はご夫婦で古本屋さんのようでした。

先程の人集りが多かったテントはまだ混雑していましたが、のぞいて見ました。のぞいて、人気の理由は一目瞭然でした。そこでは状態が良く、良質の本が他より安い価額で売られていたのです。

ぼくも『日本児童遊戯集』（東洋文庫 瀬田貞一解説）を800円で購入しました。状態もとても良く、満足です。

読者の側から言えば、古本を買うという

のは、こういう満足感を得ることも一つなのだと思いました。

満足といえば、この会場の知恩寺の並びにある進々堂（ここは学生のとき京都の友人に紹介され、気に入って京都に遊びに来るたびに寄っていた喫茶店で、四十数年ぶりだった）に寄ってコーヒーを飲みながら、買った古書をペラペラと開いて、何だか嬉しくなった。（バツカみたい）

この後、近辺の古書店を回ったのだが、即売会出店のためか、ほとんどの店が休みだった。進々堂に寄ったせいも、ノスタルジックの気分になって、百万遍から四条河原町までぶらぶら歩き、これも四十数年ぶりに、河原町の路地にある「築地」という名曲喫茶にも寄ったのです。京都の良さの一つは、古くからの店が例え喫茶店でもまだあるところか、などと思いました。

、我が拙文は横道に大きく逸れてしまったようです。他地域で得た即売会のイメージを松坂屋の「しずおか古本市」にどう生かすかを書いているはずでした。

イメージと現実の落差

これらの即売会からぼくが得た結論はデパートということもあり女性客も多いから、松坂屋でも子どもの本のコーナーにはお客が殺到するだろうというものであった。そこ

で「しめた！」と考えたのです。

これまで神田の市場で落札した児童書で、ネット上にアップしていなかった、たくさん在庫のことです。

というのにも書きましたが、市場ではひとまとめで「いくら」で落札しなければなりません。こちらが欲しい本ばかりがまとまっていけないのです。例えば百冊ひとまとめになって出品されていても、欲しい本がその内五冊だったとしても、その五冊が本当にほしいものであったら、落札しなさいで、段ボール箱に入れてあったのです。そんな段ボールの箱四十箱以上たまって、これが倉庫代わりのワンルームマンションを占拠しているのです。

そこで、この機会にこの在庫が一扫できるのではないかと考えました。

今回の即売会に段ボール箱七十六箱、冊数は二千冊以上を出品したのですが、その内の半分以上がこの在庫本だったので。

結論から言います。ぼくの思惑は見事に外れたのです。これらの在庫の多くは今、新しく借りたコンテナの中です。

なぜ売れなかったか？一つ明確なのは、他の古書店で売れないものは、何処でも売れないということです。

当たり前のことですが、読者が買って満足できる本こそ「古書」なのです。

（いずれ詳細分析のご報告も）